

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	雑報
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 124: 55-87
Issue date	1908-03-13
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6106
Right	

演說部報

例 會

二月四日。午後七時より例會を瑞邦館に開く。
寒さ烈くき晩あるにも不拘、聴衆の來るもの多
く、由比、高島の兩先生も御來臨せられたり。
會は委員が開會の辭に初まりて次の順序を追ふ
て進む。

- | | |
|---------------------|-----------|
| 一、雪中の松柏愈青を。 | 一、江島 永君 |
| 二、國家に於ける書生論。 | 二、山田 稔君 |
| 三、漢詩朗吟 | 二、湯淺九兵君 |
| 四、法然上人が故治上に及ぼしたる勢力。 | 二、小野法順君 |
| 五、妙な氣。 | 二、森岡二三君 |
| 六、ハハモニカ獨奏。 | 二、松葉重雄君 |
| 七、勢的猛進主義。 | 一、三、平林文雄君 |

八、講評、

遠山部長君

九、余興蓄音機。

各得意の辯を振ふて論ぜらる、今部長の講評を
記せば左の如し。

遠山部長の講評

一、江島君。

題は詩題に富み、あまり長からずよく整頓し思
想の構成よし。聲は通ひよく量も充分ありて圓
い聲にて演說の要素を具ふ。用語に付て「山も踰
へなければならぬ、谷も渡らなければならぬ、絶壁
も攀ぢなければならぬ、荊棘も開らかねばなら
ぬ。」とかある時の言ひ方は普通漸層法(Chimax)
を用ゐる輕少を先に、重大を跡にしたん、勢を
つけて行くが規則なり。即ち「一家之を非とし
て力行して惑ざるものは少し。一國一州之を非
として力行して惑はざるに至ては、蓋し天下一
人のみ。若し舉世之を非として力行して惑はざ
るものに至りては則ち千百年に一人のみ。」と云

べるが如き之あり。他に又之も反對の法あり、こは重き大あるを先にし輕きを後にするものにて、之論するに當り先づ止を差して尙余祐あるを示す時に用ゐ。或は攻撃の理由とし重きを先にすれば敵の力を殺ぐの利あり。然して此用法は演說者の考なるが今の場合は漸層法を用ゐるが至當あらむ。態度は体を卓に付けたるは不自由らく見え見る人も肩の張る心地す。外國の演說稽古には卓は全く又大家の演說には卓を用ゆる事なく。演說は口のみならず態度も必要なりデモスゼニスが人の雄辯術を問ひたるに答へて、一にも action 二にも action 三にも action と曰ひくは之体全体にて演說す可くと曰ふ事なり。此の心掛こそあらまほしきもの也。

二、山田君。

どうも思想の構成がよく明亮あらずと思はれたり。材料は實に豊富ありしが、咀嚼が充分至らかりし。吾々に與ふる時には少し咀嚼し充

分攝取出來る様に願度す。一番遺憾ありしは音聲也。之肺に一ぱい空氣を入れずして七分位であるから充分勢のある聲が出ない。此頃キングスカラーン先生が演壇に立つ時の用意を説て曰く「先づ演壇に立つて靜止し、聽衆を見て口を閉し充分息を入れよ。然して句切を見て息を入れつゝ充分余祐を存し置く可く。ある限り息を出してしまふのはいかぬ」と此点に注意あられ度し。句調の早いと云ふは一は持前あれども一は演說が文章体で朗讀的である故なり。之を改むるには成可く演說を談話体によ音低緩急の調子を加ふ可し、此点に於て同君のもう一層の研究を望む。吾人は將來社會民衆を對手によて演說するの覺悟あらば大に柔かの調子にて練習するの必要あり。或歐洲の斯道の大家は下女に讀み聞せて後作物を印刷せしと曰ふ。或は白樂天が詩を公にするに當りて一丁字なき老婆にまかせて理解し得らるゝを見てあせり如き大家の苦

心の存する處以て知る可し。かく理解ありて後初めて之を感動せしめ、之を激奮せしむるを得るものなれば演説は先づ明晰を尊ぶ。即ち思想及び言語の明晰なる謂に於て言の簡易あるもの一要件也。

三、岩佐君。

その聲のよき音調の妙。聞て大に快感をたばゆ四、小野君、

第一感せし事は前回に欠点と思はれ、眞面目の欠けし事が全くその跡を立ちたる事也。演題の大あるにその上又大ある佛教迄も述ぶるに至り時間の都合上よほど困られたるならむ。此處が題の撰擇につき思ふ可き處あれ。すべて中心とある可きものと背景とを甘く排置するはよほど技量を要す、之大に研究すべき處也。此夜の論する所題の一部のみたゞその緒論のみありしは遺憾あり。元來時間は一定して居る故あるべく此時間内に終結する様工夫せられたし。大

ニエルウエナスターが徹夜してなせし如き、又井上さんのあされしが如き長演説は他の目的ありて爲すものなれば、普通の演説には或時間内によく纏りの付く様練習するが必要ならむ。

材料の配置選擇はよろしかりき。難解の佛語もよく了解し得たり。唯言の句切多く流暢を欠くの觀あり、は研究を煩し度し。も少し小句切と大句切とをほどよく排置し。長くつゞくる時は吾人の理解せらるゝ範圍内に於てつゞけて充分やられ度し。

五、森岡君。

その演説体はあか／＼よし。土佐の人たけありて辯明晰にして演説を爲すに適せり。坐談的にして所謂演説句調のあかりしはよく、將來は世間一般に次第に坐談的となる傾向を見るならむ体裁は思ひ出すがまゝに曰ふと曰ふ風かりしかる中心の多い演説はせめて或る明かある一の中心点があるはうに言はれた方よからむ。大

説教家ダーナン曰く「自分は少なき演説を度々するが然し時に之等を總括して爲す」と各節各々中心ありと雖之を總括せば各々一題の或る中心に集合す、かくあり度きもの也。

六、平林君。

此の前の會に注意せしによりよほど改善を認めたり、その思想の明晰となりしが如き、その音調の初め大なりしがあくありし如き、皆よくありしやうあり。此元氣満々たる題を掲げて演説するに當り、手を前に握りかしこまつてやられたが元來手を前に組むは、かしこまる時、恭しく言ふ時、用ゐる故、演壇に昇りし初め、其他時に應じてはよろしからむが、初めより終り迄の仕方にて通すはいかぬ事也。充分意味を強める点もありしに手を用ゐざりしは利器を無にせるものと言ふ可し。二度手を動かされしが惜いかか元氣を欠きたり。之手をあぐるは準備にして下ぐる時が大切なり。之大に遺憾なりし点な

るがもう一つは視線の移動あり、その聴衆を見るに就ては色々説あり或は一人の聴衆を定めて見よと云ひ或は最初に全体を一見して一方に視線をとむ可しと曰ひ或は時々方向を變ゆ可しと曰ふされど始終あちこちに眼を走するはいかぬ事也。演説の妙は聴者をして始終好奇心を動かして辯士に傾聴せしむるにあり。されば態度、音調、身振、其他すべて平板に流るは避けたる方よし。

法科生懇話會報

突如靜かある寮内に龍南新報は民黨の機關として發兌せられ其の翌日帝國時報は政府黨の機關として呱呱の聲を擧げ政界何となく色めいて思ひを日比谷原頭に馳せてる健兒一百その血は湧いた、龍南新報第二號は其の論説に政府攻撃の檄文を掲げて新聞條例に問はれ發賣を禁止せられ帝國時報は號外を出して其の機敏ある報導を

誇つた、機關を失つたる民黨は更らに在野新報と銘打つたる機關紙を發刊して政府攻撃の鋒を収めず飽く迄反對の氣勢を示し帝國時報は二號を出して政府を辯護し更らに號外を刊行して藏相の財政談を載せ政界何となく活氣を呈した、民黨は大會を催して刃折れ矢盡きる共政府案反對の決議をあし政界の風雲愈々急である内閣總辭職か議會の解散か到底穩かな閉會は望まれまい、あゝ明日の天氣は雨となるやら風となるやら

一月卅日午後六時半松尾衆議院議長は開會を宣し奉答文棒呈の爲め鳳凰の間に伺候した時の陛下の御言葉を一同起立の裡に傳へ更らに三四の注意を述べ藤塚幹長は政府委員の氏名を報告し下田首相の施政方針の演説に移る。

顧みて堂内を眺むれば意氣捲ける民黨の諸氏微笑んで議案を手にせる政府黨の諸氏さては民黨の調査員、綺羅星の如く嚴然と濟まし込んで

諸大臣や次官や政府委員や何れたとらぬ剛の者揃ひ院内何となく殺氣を帯びて靜まり返つて傍聽席は片唾を呑んで熱心ある聽衆を以つて埋められ廣き議事堂も森として只花電燈の獨り瞬いてるのみである、首相が拍子に送られて其の席に歸つて愈々其の日の日程に入る、横手代議士民黨の意見を提げ精細ある調査を土臺として移民に關する質問は猛烈であつた田端外相是れに答へ先づ朝野の第一戰開かれんとする利那徵民黨院内總理は都合四ヶ條の緊急動議を提出して是れに對する採決の結果民黨の勝ちに歸り動議は通過した

幹長に紹介されて熊本縣選出太田代議士は「五高學寮南北寮改築の件」と云ふ建議案を提げて演壇に現はれ次で奥山文部次官の答辨演説ありて委員附托となる

政府提出電車國有之件は森岡内務次官の説明に始まり森重代議士反對の氣焰を吐き藤村、森谷

兩政府委員は精密ある數字の上に根底をたいて盛んに國有の利を説き甲論乙驅遂に委員附托とある

次で博覽會延期の件は青木農商務次官の説明に始まり二三の質問の後委員附托とある

本日議場の花と人も吾れも豫期して居つた増税案は愈々議題に上つた、政府側も是れ丈けはと力んで其の通過を祈り民黨は死力を盡くして反對するので朝野大決戰の幕は愈々これからである、滿場寂として聲なく上院議員傍聽席には此の時由比伯の頂、獨り輝いてゐる、笠原藏相の起つて増税の已むべからざるを述べ兒玉代議士は其の惡税あるを論じて決戰愈々急である、戦い正さに酣ある頃民黨より發したる質問の征矢はしあく電車國有にそれ岐路に入らんとしたので山浦政府黨院内總理は枝葉の議論を避け直ちに本論に入り議事の進行を計らん事を議長に望み魚住森其の他の政府委員の熱心なる辯護と太

田兒玉横手諸代議士の盛んある反對論とは議場稀れに見る活氣を呈した、山浦政総はこゝと潮合を見て演壇に馳け上り増税の已むべからざるを論じ吾黨の名を以つて政府案に賛成する旨を述べ徴民総はやをら身を起こして悠々演壇に上り懸河の辯を振はんとしてはあくも首相の怒氣を買ひ首相は其の人身攻撃に亘る所以を以つて議長に民總の演說中止を迫り議長は其の必要を認めずとて民總は其の論歩を進めた、時に天外聲あり翰林は 詔勅の下れるを報じ一同起立して議長は是れを朗讀した、嗚呼遂に衆議院は解散を命ぜられたのである、斯くして帝國五十六議會は終りを告げた、時正に九時半、細雨霏々として龍田山は黒く眠つてゐる(山法師投)

運動部報

庭球 (二月四日)

審判者 安藤基平氏

七高軍 五高軍

堀山本	谷口	野田	岡村	寺村	伊庭	田中	吉江	關	尾崎	山根	田村	渡部	齊藤	櫻井	優待堀山本
渡部	下田	武富	馬場	優待	山本	安藤	小松	村山	佐立	尾形	渡部	下田	石橋	平野	藏原
中に先づ砲火を交へしは	午前十時といふに拍手の	惱めるか如し	之の日空晴れて南風する	び午前中は兩軍の將士や					敵ながら健氣に見やられ	たり。	軍凡て猛りに猛りたる様	敵の將士はもとより應援	て舊怨に報ひ呉れものと	こそ滿腔の憤怒を發揮し	薪骨膽是に二星霜。今日

我が照島藏原組と彼の堀山本組となり。堀組は實力敵の副將尾崎組の壘を摩するものあり。我照島組は我軍の重鎮あり兩軍の策戦は期せずして一揆に出で、劈頭の活躍は正に兩軍の死活を決する賽たらんこと。堀はロッピングを以て鳴り。照島は鉄砲を以て名あり。プレーの命は降りぬ。知らず雨となるが將荒となるか。堀は徹頭徹尾ロッピングを以て照島の鉄砲を柳に風と受流し藏原を以て乗せしむるの機を與へず然るに如何にしけん照島の鉄砲次第に勢を減じて平凡球とあり屢々敵の前衛に乗せられ、遂にゲームカウント、スリーワンにて千秋の恨を呑んで斃れたり。されども吾人は照島組の實力を信じて疑はず、今其敗因の主あるものを擧ぐれば、君が得意の鐵砲を癢く却りて其不得手ある半ロッピングの球を打ちしにあり、蓋しこれ餘りに自己の責任を過重視せし爲か。あたらずに豎子をして名をあさしめしは定めし口惜からんも勝敗は

兵家の常かりに漢幸。自重して可なり、堀山本組對馬原大島組。堀は依然としてロツピングを以て、山本の前衛又侮り難、馬原奮戦大い力め、隼の如き大島は右往左往敵を苦め、ゲームはツーオールとあれり。茲に特筆すべきは第四回のゲームにしてデユースを繰り返す事實に十有一回の後漸くにして敵を屠れる事あり、以て此激戦如何に凄かりしかを知るに足らむ。されども時に利あらず離行かず刀折れ矢盡き退き。敵は茲に一組の優退を出せり

櫻井齊藤——石橋平野。櫻井洒々たる風采楚々として人を動かすものあり、而して我には紅顔豊頬の平野あり、將さに是れ萬緑中の紅一点なり。是に於てか彌次の旗は舞ひ、聲援湧く如く、吶聲は城山に動かしぬ。第一戦に於て我先づ一点を得しも、石橋敗衄の後をうけ、爲か少しくアセリし氣味あり、其球正鵠を失してアウト多く、平野又其鋭鋒を裏み棘腕を振ばずして

止み、ゲームカウンント、スリワンにて我敗に歸せり斯くして勝ち誇り敵軍は宛ら旭日の天に沖するが如く、彼の彌次は狂喜し。罵嘲し。怒號し。顧みて吾校生徒を望めば顔色聊か悽愴不安の色あり

櫻井齊藤——下田渡邊。我衰勢を挽回すべく重任を負ふて堂々馬を陣頭にすゝめしは我下田渡邊組とす。下田が悠々逼らざる態度と渡邊が泰然自若たる様子とは相待ちて、先づ吾人の意を強しぬ。果せる哉下田の球は一糸乱れず、虚々實々、緩に、急に、巧に敵の弱点を衝き、孫子の所謂紛々紜々として乱すべからず、渾々沌々として敗るべからざるものあり。渡部の前衛は月に嘯く猛虎の概あり、其獍猛にして確的あるスマッシングに至りては敵にすら思はず三嘆の聲を發せしめゲームカウンント三對一にて敵は我刀の鎗とある。

渡部田村——下田渡部。渡部田村、敵の年少組

なり。年の若き爲か、將又下田組の武者振りに辟易せしか。後衛渡部はミスの乱發、田村の前衛は要するに無能。到底我敵に非らず。其前衛はレシーブの外一度も、球をラケットに當てず事なくスコソクの敗辱を蒙りては寧ろ當然と云ふべし。

茲に於て我に一組の優待生し、一同始めて愁眉を開けり。時に日は正に午。一時間休戦。

午後一時再開戦

山根尾崎——佐立尾形。愈々敵の副將は喝采に送られて登場せり。其前衛尾崎は嘗て武夫原に於て嘖々たる功名を博し、腕に覺るある古武士あり。我佐立尾形は新進氣鋭の勇士あり、日は麗かにて風は漸く靜かなるに反し、副將を向へて敵の彌次は小旗を打ちふり、聲援の聲喧々囂々として耳を聳せんはかりあり。流石は敵の副將程ありて武者振甚だうるはしく、我軍力戦奮闘大にづとめくもまづ敵に二點を與へぬ。時

に佐立の意決する處ありしか。尾形の胸中成算生ぜしか。見よや佐立の眉は揚れり、尾形の眼は輝きぬ。

果然佐立のサーブは着々として奏功し、尾形の前衛は翻々として菜花に狂ふ胡蝶の如く、左に現はれ、右に没し、盛に敵を苦め遂にゲームカウント、ツーオールとなれり。勝敗の決はあます所の一戦にあり。満場片唾をのみ、汗を握りて之を凝視す、しかも天か命か、戦は遂に我に利あらず。流星光底空しく長蛇を逸しぬ。

佐立組は破れたりと雖も意を安くて可なり。佐立の後衛、尾形の前衛相俟ちて敵の荒膽を挫き、敵が此次に村山組に破れくは勿論村山の奮闘によるも、無形上に與へて此打撃の響況する所甚だ大あるや明なり。

山根尾崎——村山小松。村山の華奢なる姿を見て敵は「この小冠者何程の事あらん」と聊か侮り景色見をなげ、されども大なるカーブを有す

る村山獨特のサーブは頻に敵を誦殺し。其ブレ
ーシングと打球の時モーションの不明なる姿勢
とは、尾崎を掣肘して活躍を恣からしめず。先
つ二點をたさむ。されど敵もさる者あり、我前
衛の不振に乗じて決死の奮戦惡闘を以て二點を
得茲にゲームはツーオールとなり歡客は一戰毎
に心を驚かし、片唾を吞めり、時なる哉、天な
る哉、小松の打ち込み、ボールは却りて反對
の方向にバウントー飛ぶ事僅に寸許。敵は遂に
降を我軍門に請ふ。萬歳の吶聲は萬雷の如く、
拍手は急霰の如し、時に我應援軍中、夙に令名
噴々たる神山義次君あり。狂喜のあまり双手に
夏帽を捧げて躍り出せしが力あまりて之を八裂
にせり（翌日の野球仕合に又もや石田の冬帽を
破る）是に於て神山の名麿城に隠れな。顧み
て七高軍を望めば杖とも柱とも頼み、副將を失
い顔色、土の如し。實に村山組は當日の殊勲者
あり。

關吉江——村山小松。關の後衛吉江の前衛、其
に恐るべき程の敵に非ず。しかも思ひきや大敵
を破りて意氣衝天の概ある村山組が、強弩の末
魯縞を穿たずして此組に敗れんとは、思ふに之
れ敵の豪將を破り、既に意滿ち、小成に安せし
にあらざるなきか。此例は屢々あれば注意せざ
るべからず。小松の前衛はミスに拘らず臆する
事なく平氣の態度を持せしは感服の外なし
顧て戰の成行見れば敵も味方も各優待一組宛と
はいへ、敵は尙五組を有し、吾には三組を存す
るのみ（優待組共）如何に我れ一騎當千の勇士と
は云へ、前途決して旦々たるものには非ず、實
にこれ危急存亡の秋あり。此時に當り安藤山本
組は悠々として顯はれぬ。一拍は歡聲を誘ひ、一
撃は拍手を起す

關、吉江——安藤山本。吉江は前衛にてサブをな
し機を見て前進す、關又強球に名あるよしかれ
どもマツチには慣れざるが如し。安藤の態度は

優々、山本は莞爾として始終笑を含み綽々として餘裕あり、我先づアウトプレーヤーたり、吉江のサブ入らずセコンドサブ入りしに安藤之をネットス。觀者之を危みしやも知らざれど畢竟取越苦勞にすぎず。次ぎに山本が獨特にして正確なるバックは一發のレシーブを以て先づ敵の膽を寒からしめぬ。敵は前衛サブを爲すを以て時々陣形乱れしも、我れは軍容井然、後衛安藤は敵の力をはかりよき程にあすらへば、前衛山本は飛鳥の如く身を躍て其輕妙なるネットプレーは敵軍をして哑然たらしめゲーム三對一にて敵は我に兜をぬきぬ

はじめ安藤聊か不振の様見ゆるを以て彼の眞價を疑ふは甚だ早計に失す。之れ敵が期待せしよりは遙に下手ありしが爲め、自ら氣が乗らず、全力を傾注する程の甲斐もなく、面白味もなかりし爲あり、鶏を割くに牛刀を要せざりしのみ

田中、伊庭——安藤山本。田中の評番は大した物

ありしかば吾人は大ある決心と覺悟を以て向ひしが、いざ鎌倉と云ふ試合の場合には、アガつて了つて薩張り物にならず、加之此度は安藤も少く力瘤を入れ、山本の前衛愈々妙、ゲームは形の如く我勝利に歸るぬ

日は漸く斜に、戰は正に酣、殺氣は場に充つ、時に湧くが如き拍手喝采の中に意氣揚々として登場せしは御大將武富馬場組とす、

寺村、岡——武富馬場、武富の球は雲間を縫ふ流星の如く、熱球は風を切つて空に響あり、馬場の前衛に至つては天馬空を行くの概あり、丁と拂へば輕妙あるストツププレーとなり、發止と打ては猛烈ある打込とある、例へば螳螂の斧を拂つて龍車に向ふが如く、敵は一溜りもなくして退散せり實に前後三回のゲームを通して我組には只二ツのミスありのみ第一回第三回共にシャットアウトとは快心の至りならずや

是に於て愈々敵の大將組の出陣を促し、正に是

れ天下の關が原あり、後衛野田が其偉大なる軀幹と臂刀とを利用して、打ち出す球は獯猛と云ふも愚にして、前衛谷口はラケット取つては鹿兒島獨歩と稱せらるゝ、知らず掉尾の奮闘果して如何野田、谷口武富馬場、我軍先づレシーハとなる。野田の球は獯猛、偏先づネットス。次ぎに馬場レシーバーとあるや、谷口は右を開いて誘の隙を見せ、私にモーシヨンをも右にす、馬場の炯眼は早くも之を觀破し、御得意の猛球を以て彼が元居りし位置を襲へば球はフリーパスとある斯くして第一戦はシャットアウトにて我先づ一點を得、第二戦に於て武富のプレーシングは谷口の左を掠めて之を抜く事二回、野田の球又慎重を欠ぎ暴虎憑河の氣味あり、我軍更に一點を加ふ。第三戦に於て谷口益々振はず、空しく馬場の翻弄する所あり、愁然として退きしは、袖をくぼる紅涙をぐろ有情の人の心を動しぬ

嘗て中空を覆ひ 敵の應援旗は今や影を失し怒號は變して悲嘆となり、絶叫は化して耳語となり只我軍歡喜の聲のみ鶴城の天地を動せり。次で兩軍優待組の試合とある
堀、山本——下田渡邊、大塚の將に覆らんとする一本の支ふる所に非らず、堀のロツピングも渡部のシマツヤシングには鏗一文の價値もなく、ケム三對一にて我軍の勝に歸しぬ、時正に三時三十分

四十年七月以降職員異動

教授兼生徒監	遠山	參良
同	奥	太一郎
同	由比	比質
同	友枝	高彦

右明治四十年六月廿七日勅令第二百四十六號ヲ以テ兼官廢官

同 奥 太 一 郎

同 由 比 質

同 友 枝 高 彦

補第五高等學校生徒監(六月二十八日)

囑託教員 戸張瀧三郎

依願囑託ヲ解ク(六月三十日)

休職教授 武 藤 虎 太

第二高等學校教授ニ任セラル(七月四日)

正七位 戸 澤 正 保

任第五高等學校教授

叙高等官六等(七月三十一日)

教 授 兒 島 献 吉 郎

叙勳六等授瑞寶章(六月三十日)

休職教授 關 俊 彦

依願免本官(八月三十一日)

教 授 厨 川 辰 夫

第三高等學校教授ニ任セラル(九月七日)

獨國人マツクス、アウグスト、ゲエベル

右ハ本年九月一日ヨリ明治四十一年八月三十日
マデ獨語科ノ教師トシテ傭入ル

宮 野 景 一

講師ヲ囑託ス(九月十日)

熊本縣立中學濟々覺教諭兼舍監

牧 山 清

任第五高等學校教授

叙高等官六等(九月十三日)

陸軍中尉 濱 田 哲

講師ニ囑託ス(十一月六日)

教 授 牧 山 清

叙正七位(十一月二十日)

阿 形 輝 司

任第五高等學校教授

叙高等官七等

白 川 精 一

任第五高等學校教授

叙高等官七等

陸軍中尉 井 場 直
任第五高等學校助教授(以上十二月二十二日)

教授 杉山岩三郎

叙勳五等授瑞寶章

教授 長谷川 貞一郎

叙勳六等授瑞寶章(以上十二月廿七日)

囑託講師 松 江 初 童

依願囑託ヲ解ク(一月十三日)

教授 友 枝 高 彦

京都帝國大學文科助教授ニ任セラル(二月七日)

左の諸氏より龍南會宛に新年賀狀を給はりたり

茲に謹んで謝す

猪 股 勳氏 川 田 鐵 彌氏

内 田 虎 太郎氏 井 岡 忠 雄氏

貝 原 良 介氏 内 藤 ○ 助氏

別府三穂三郎氏 福 富 卯 一 郎氏

田 澤 義 輔氏 山 邊 武 彦氏

鴛 淵 信 雄氏

黒 田 孫 一氏

池 田 秀 雄氏

惠 利 武氏

福 井 彦 次 郎氏

熊 谷 巖氏

齊 藤 宗 碩氏

我庭野雨疎鹿兒島遠征隊に對する寄附左の如し
茲に謹んで謝意を表し候也

一金參拾八圓〇參錢

職 員 中

一金貳拾七圓

校長教頭兩先生

一金五圓

篠本先生(在七高)

一金七圓六拾錢

一部三年甲組

一金四圓五拾錢

一部三年乙組

一金九圓參拾錢

一部三年丙組

一金六圓

二部三年甲組

一金五圓七十錢

二部三年乙組

一金拾圓貳拾錢

三部 三年

一金拾圓貳拾錢

一部二年甲組

一金六圓九拾錢

一部二年乙組

一金八圓七拾錢

一部二年丙組

一金九圓

二部二年甲組

一金八圓七拾錢

二部二年乙組

一金拾貳圓九拾錢

三部二年

一金拾貳圓六拾錢

一部一年甲ノ一

一金六圓

一部一年甲ノ二

一金八圓七拾錢

一部一年乙組

一金九圓

一部一年丙組

一金九圓六拾錢

二部一年甲組

一金九圓參拾錢

二部一年乙組

一金拾參圓貳拾錢

三部一年

右

秋季柔道紅白大勝負記事

霜に傲る菊は未だ遠い、錦と榮ゆる紅葉にも少しは間がある。が而し十月と云へば秋だもうすつかり秋だ、古いが馬も肥わて居るらしい、天も妙に澄み渡つて來た、いゝ時節だ、無論勉強

にもよい、まして遊ばうと云ふにはた調へだ。素裕の身輕で思ふ存分野山を馳け廻る愉快たら實際あい。見よ古い新らしい白三筋が皆言ひ合せた様に動き出すじやないか。此時だ人間が天與の膽を練り氣を養つて、適れ打たば響かん五尺の鉄骨を鳴らすのは。聖哲孟軻が所謂至大至剛沛乎として天地の間に塞る浩然の氣を嘯くのは、事實此時を措いて、何時だらう。そこで吾柔道部は此好季に乘じ秋季紅白大勝負を催す事にした。月の十一日だ。今日一日は實に雲を捲き雨を起し龍躍り天嘯くといふ大々の活劇が濟美館の天地に現はるゝのである。聞く丈でも骨がピンとする。偕戦は正二時からだ、聽て賭般の準備が調ふてチン／＼と二時の時計が聞ゆるや、氣早の面々待ち兼たと云ふ様な面構へ先づ勇ましく肩を怒らした、山の様な健兒が稽古衣引き擔いで三々五々牛の歩む様にノソ／＼集まり來る。それが皆一人として勇むで居ないものはあ

い、が就中新來の豪傑連が通れ初陣の功名に一期の譽を輝かさんづと、口には云はぬが自から眉を昂げ腕をさすつて武者振るつてゐる様は、余所目にも夫と察せられて一入の勇ましさ心地よさである、戦は愈是からだ先づ今日の勝負表から書いて見るとしやう

紅 白 白軍の永井 紅軍の士二人を
川 尻 永井 斬つて先づ先登第一の功をあ
八幡 永井 げ併せて白軍の爲に最先の氣
杉 永井 焰を揚ぐ。紅軍の杉怒つて是
杉 萩 を屠り更に萩を仆したが山本
杉 山本 の爲めに最後を遂げた、紅軍
川 村 山本 川村出で、山本とわけ、次で
川 村 今井 古川、今井、又分となる。次
古 川 今井 は紅軍の武内白軍の江角是は
武 内 江角 ヒネリにて武内勝ち下山出で
武 内 下山 武内を屠り下山は越川に仆
城 川 下山 されて退けば太石、越川、を
城 川 大石

高 木 大石 打つて高木に向ふ。高木、大石
高 木 西田 を投げて西田代り遂に分をさ
平 田 小川 る。一勝一敗要するに此間の
平 田 赤林 勝負は瞬く間に終つて仕舞つ
平 田 柴原 て聊か呆氣ない有様であつた
平 田 藤野 而し何れも満身の勇氣を鼓し
角 田 金丸 て、功名の魁たらんと云ふ精
兒 玉 金丸 神の面影は有々と讀まれて居
兒 玉 太島 た。
福 多 大島 次に現はれたは紅軍の平田自
竹 田 大島 軍の小川である二三合平田の
太 田 六島 大腰は小川を翻へた。平田
大 野 大島 大腰は小川を翻へた。平田
大 野 大田研 の勇氣は戦ふ毎に益盛かんに
佐 野 大田 あつて来る。次の赤林、柴原
江 島 深川 皆彼が爲に無残の最後を遂げ
江 島 宇都宮 た。最後に藤野と組んで勝負
江 島 中材寛 つかず引分となつた。今日の
江 島 魚住 戦闘中の尤も目覺しい働きの

湯本	湯本	笠原	笠原	橋本	田原	高妻	兒玉勳	田先生	田先生	守田	草野	草野	草野	三木	佐野	佐野	星川	星川
矢形	古財	古財	辻	辻	岩田	岩田	池田	池田	佐々木	佐々木	今井	山下	山下	山下	大里	北川	豐田	魚住

一つである好漢大に勉むる處あれ。平田の爲めに切り崩されて白軍少く色めいて來た已れやれと白の金丸紅の角田を膝落しに仆く兒玉と渡り合ふ。暫く戰つて居る中兒玉のメに金丸首を落し大島と代る体落と云ふ利器を提げて居る大島は早速と兒玉を刃の錆となし續いて福田、竹田、太田皆同じ枕の下に冥途の旅立。是にて白軍の陣容又大に整ひ士氣頗る振ふ。今日の戰闘中尤も目覺しき働の二である。勇を振つて白軍の爲に萬丈の氣焰を吐く處正に金鵝勳章功三級。死んで名を青史に留むると云ふのは昔から勇士の尤

も光榮とする處である。大島が縦横奮闘の末力盡きて大野の爲めに首掻き切られたのは正しく勇士たる本領を發揮したものである。いざ吊ひ合戦と白の太田躍り出で無二無三に大野を押へ込む。已れ憎いと許り紅軍の佐野大野に立ち向ふ何れ劣らず揉みつ揉まれつ數十分勝負果てあいで引分。次は紅軍の江嶋白軍の深川である。兩者體力屈強江嶋は殊に場數功者の曲者らしい得意の体落業で深川を仆く續いて宇都宮を巴にて仆く中村寛又体落にて薙ぎ仆さる。素敵の勢だ技も余程立派だ。此時いざ見參と現れ出たる鬚武者こそ劍術部新來の勇將魚住なのである。見るから屈強の体格だ三人斬つて一寸一息ついた江嶋は未だ豪も元氣が衰へない魚住と好敵手だ。魚住が業は脊負江嶋のは前にも云つた体落掛けつ掛けられつ中々勝負が付かない。魚住焦つてかけた最後の膝落に江嶋は哀れ首を授けた今日の目覺しい働の第三である。是邊から

負勝は大分賞が入つて來た。

魚住 星川 二人の体格よくも似寄つた者だ。

魚住例によつて脊負はんとすると星川は巴に仆さんとする。第一に失敗した星川の巴は第二回目に業ありを取つた魚住怒つて掛けた体落是又業ありで前の業ありが消ゆる。無念と星川が第三番の巴見事功を奏して魚住眞逆様。

星川 豊田 豊田は數度戰場功者の曲者である、大腰が得意だ互に慎重に闘つて居つたが豊田大腰の業物目に物見せて呉れんと進んで來た奴を星川危くかけ外し是より巴となつたり大腰となつたり組むづはぐれつ中々勝負が付そふもあいで遂に他日を期して左右に分れて行つた。

佐野 北川 何れも横に張つた頑丈な身體のつくりだ。一二合挑んで居た中何ふした機であつたか北川押へ込まれて其儘袈裟固の大盤石に潰されて果敢あい最后。今日は北川の爲には佛滅の日だつたらう。

佐野 大里 大里は母校の老將だ技も力も相應にあるが何ふも道場に余り顔見せない。其故が今日の勝負如何にも分が悪くて危い處が多い、新銳の佐野の爲に横四方に固められたのは残念だが仕方があい。

佐野 山下 佐野は是で三人目だ。が山下が疾風の様を勢で突嗟の間に攻め來つた体落の返業に首は其儘コロリ。

山下 三木 三木は亦老功の武者であるがごふも矢張道場に縁が遠い方だ。戦闘大に務めたに拘らず山下に功を奪はれたのは其原因主として爰にありと云はねばなるまい今少し振つて欲しい。

山下 草野 近來の草野の柔道熱は評判者だ其筈だ一寸した隙があると直ぐに柔道の様を眞似をして居るんだもの。出るが早いか電光の様に山下を巴で宙に翻へした手際は決して偶然じゃない熱心と練習の効は恐ろしいものだ靨面だ。

草野 今井 今井の体格は云ひ分がよい。長も伸び横も揃つて居る業もよい力もある。而し何

ふも一体に余り勝負が温和し過ぎる勝ち誇つた草野を例の体落に掛け仆さんとする處を其儘直機敵の爲に返されて一本取られたのは餘程風の吹き廻しが悪い日でもあつたらうが今少し機敏と云ふ点があつて欲々かつた様に思はるゝ。

草野 佐々木 得意の影は今草野が眉の邊に動いて居る。彼は已に二人仆したのだ。而し此度の敵は誰あらう小天狗てふ其名も高き佐々木の冠者だ。出るといきなり蹴上げた佐々木得意の巴投にさしもの草野も見事水もたまらず斬り落された而し今日の草野が戦ひ振は中々見事であつた。

佐々木 守田 西國柔道の本場福岡鍛ひの守田冠者技の妙は殆ど其奥に入らんとて居るの今月初陣の戦に通れ功名手柄せんと得意の脊負ひ以て挑戦數合。が佐々木もさる者中々動かす

聽て一瞬守田に隙があつたか例の巴見事に功あつて守田遂に時利あらず。

佐々木 モール先生 モール先生の熱心は實に感心だ。日々殆ど濟美館に其影を見かい事は多い。近來めきゝ態度を技ありが上達して來て今日の晴の場所で強敵佐々木に渡り合ひ縦横奮闘遂に勝利の冠を得るに至つたのは決して偶然じやない偏に熱心の賜だと云ふべしである。

モール先生 池田 打たば響かうと云ふ池田が剛頑は學校の名物である。稽古熱心も亦人並以上だわけて近頃の元氣、鬼神も跳足だ。今もモール先生勝に乗つて巨大の軀幹に満身の力を罩めて、攻めて來るのをしほらしと許り池田立ち迎へ二三合挑み合ふ中、モール先生、得意の體落に仆さんと來る處を何のと池田強力に返して業あり九分。委細構はずモール先生勢猛く尙も攻め寄するを右に左に掛け外し合せ業に池田一本を占む。

池田 兒玉 新來勇士中の旗頭本場鍛ひの兒玉のそり／＼と牛の様に現はれて來た。中肉中背ではあるが力は節々に溢れて居る正に池田と好取組だ。兩軍片唾を吞むで見入つて居る然し兩人共中々慎重で腰が低い曳應の掛聲のみ高い聽て機を見た兒玉十八番の腰拂に攻めた池田動かない。池田例の體落に出た兒玉應じないかくて二合三合兒玉の巴半功あり。怒らない事か池田獅子吼一番奮闘更に十數合がうなつては兩人共大重だ而し勝負は何時果つるごしも見えあい出るのは兩人の油汗評だ。爰に至つて他日の再會を期し分るゝ事にあつた。余程力の入つた勝負であつたが而し兩人共余りに力を出し過ぎて技の妙處を發揮するに至らなかつたのは残念であつた。

岩田 高妻 何れも濟美館上の老將である跳腰と體落に兩士秘術を盡して奮闘した。最後岩田の體落は見事高妻をして疊を背負はせた。高妻

今日は何ふも元氣がない何となく大儀らしくかつた一體何ふしたんだらう。

岩田 田原 小兵と云ふ條田原の背負は龍南の珍である。此の戦は技と技との戦である。從つて華がで氣持がよい。一離一合各秘術を盡して神妙を極む。巴、體落、背負其間に錯落として相交る處實に奇麗だ靜心なく春風に散つて居る花の間をわけて行く様である。五分又二分依て止むなく何れとも扇が揚らない遂に折柄の夕陽の間に馬を左右に還して次の戦を契る。

橋本 辻 橋本は戸張道場の重鎮である辻は吾校の花役者である。そして兩人共背負が得手だ始め辻の體落余り遠過ぎて返し業ありを取られた。不覺と叫む辻は勢込むで橋本を背負はんとした半分功あり橋本又脊負返さんとしたが功なく續いて辻が思ひ切つて脊負つた抛け見事一本橋本屍を横ゆる。

辻 笠原 笠原素より鉄中の鋒々な者辻どの顔

合せは是で三回だ而も此前には無念の不覺を取つた今度はその復讐だ兩人共體格が能く似合つて居るが殊に技が垢抜けがして居る輕妙だ。會稽の恥辱此度こそはと意氣込むで攻め來る笠原の勢は潮の湧の様だ。前の戰に少し草臥れたか辻が氣勢聊か振はない間もなく脊負の合せ業でまふと仇討せられた。

笠原 古財 一寸見ると小男の押せば倒れそふを見掛だがその實は中々の曲者力がある上に業が頗る奇抜だ敏捷だ。夫も其筈だ古財は戸張道場では御大將株の随一人だもの。電光石火忽ちの間に笠原體落にて疊の上に横はつた。

古財 湯本 色の白い太つた、如何にも悠々として居る湯本の力は圖り難い、第一足がよい容易に仆れまい彼は今日紅軍の御大將である紅軍はごよめいた。而し彼は落着いて居る颯と許り猿の様に古財が擔がんと進むで來る奴を呷とこたへて跳ね返した剛力に早くも古財が體は疊へ

コロリ。

湯本 矢形 夕陽は今金峯の彼方に沈まんとして薄紅葉した華やかな折柄の光に道場の疊は半ば美しく染め抜かれて居る。と見ると場の左右には早や兩軍の御大將が打物取つてかけ並むで居る。矢形は湯本に比べて肉が少ない而し上脊があつて肉付が緊まつて居る。そして取口が尤も忠實で慎重である。朝夕の相撲振をつくりだ。今太刀打は始まつたが何れも容易に動かない飽く迄機をねらつて居る。矢形は組業に勝を得やうと焦り湯本は投に利を制しやうと苦むで居るが双方共に敵の呼吸を知つて居るので思ふ坪に陥らない。曳々應々の聲のみ場の四方を震はせて居る。五十分勝負は果てそふもあいではれ又再會を約して各兩軍歡呼の中に帷幕に包まれ去つた

時に點鐘正に五時半である短い秋の日はもう半ば隠れ去つて闇の薄衣は次第々々に武夫原の四

方を包むで居る。空には宵の明星が未だ新らしい水の様な光を抛けて路行く人を慰め顔である。かくて楽しい勇ましい幾多勇壯猛士の戦闘は其終を告げた。習學寮の一角硝子窓を洩れて聞ゆる吟詩の一節。

『猛虎一聲山月高』あゝ猛虎一聲月は今一時間の後に出でんとするのである。

最後に舊生徒及新入生徒の昇級及び編入を掲げ筆を擱く。

昇級者

加瀬丈兵衛 笠原 敬輔 月次勝右工門

右二級乙

笠原 隆輔 田原哲次郎 湯本不二男 岩田 重助

矢形 百一 辻 敬 正 大里里八郎 池田庄五郎

佐々木不愠 高妻 直道

右三級甲

草野 義一 大野源五郎 今井 博茂 堀 部 英

八 木 繁 近藤 直輔

右三級乙

七十六

飯田 豐三 徹 有 機 三 木 五 郎 鈴木 秀幹

豊田 秀兼 林 哲 夫 野村 直躬 小野 法順

吉 田 定 村山鹿之介 志摩 次郎

右四級甲

岡本 正康 吉岡 秀夫 平林 文雄 飯田 輝夫

奥山 奥八 山家 信次 光永 正雄 神山 義次

石田 淳三 兒島 庸雄 大内 兵工 藤塚 佐介

右四級乙

編入者

兒玉 勳夫 山下 均 守田良太郎 江島 永

平田喜代太 佐伯 徳雄 佐野 隆益

右三級乙

魚住 正男 大島 浩 森 信

右四級甲

中村 寛猛 宇都宮一磨 太田 研介 深川 爲一

永 井 貢

右四級乙

糸賀 忝藏 四澤 義徴 竹内 雀 青木 俊二

伊藤 祐輝 岡 部 常 兒玉 魯一 大津 留聰

大野 豊吉 竹田 竹一 今井 佐一 八幡 貞入

下山 震一 高木 一之 藤野潔次郎 小川藤次郎

品川 靜 根本 常道 村上 榮

右五級甲 林 謹次郎 青崎 秀雄 田中 貞介 花岡 俊夫
望月 見吉 駒田 亥久雄 飯尾 英三郎 井上 有智
右五級乙

以後三級乙以上を以て黒帶者とす

柔 道 一 部

寒稽古及鏡開式

獨り柔道擊劍等の武術許りでかく技藝音樂等にも夫々寒稽古と云ふものがある。言ふ迄もかく寒稽古は寒の中の極く寒い間を撰むで行ふもので云は、一種の精神教育である。何も極寒鐵の様な日に二十日とか三十日とかの間。寒稽古したからつて、それが直ぐに名人となり、奥技に達すると云ふ譯のものではない。が而し何に限らず、物事を成就するには熱心と云ふものが必要である。意志と云ふものが必要である。熱心が足らず意志が薄弱であつたら、成効の美果は到底捕ふる事は出来ない。それで名人にあらう大家にあらうと云ものがあつたら、白痴だ天

保錢だ。寒稽古は之を試めすのだ、而して之を養成せんとするので。火の様な熱心といふ鐵の様な意志とは、實に寒稽古といふ畑から生ずる美はしき花である。甘味なる果實である。未だ明治にならぬ封建の時代では、随分多くの武士連は此寒稽古の爲に泣かせられたものだをふな、千人槍等といふと、一日の間に千人を相手は槍術の試合をするものだをふだが、其辛い事たらないといふ事である。稽古の翌朝等には血の小便が出る位だといふから以て其何んなに稽古が酷かつたかが分る。尤も毎日の事でもあるまいが。兎に角武術一點張の時代の事であるから素より今日とは比べものにあらないのは當然である。何しろ寒稽古が普通の『マアいゝ加減に』位の調子じや到底覺束ないには極まつ居る彼の寒い切らるゝ様な朝風の間をくゞつて、槍の襖たてた様に果てしなう連て居る、霜柱を踏み碎いて、それで未だ眞暗い闇の沈黙を破つて、人は暖い

蒲團の中に譯もなくすや、心地よげに眠つて居るのに、獨り眠い眼を刮り冷を切つた稽古衣を裸身につけて、淋しそふに照らして居る電燈を頼りに鐵板の如くに堅い冷い道場の疊の上に立つ迄の辛さ苦しさ。之が天氣のよい月の冴えた星のある日あら未だしも、若し失れ乾ひ切つた天地を置めて、プー、ビュー、と所謂大塊の噫氣先生が癩癩玉を破裂させたら事だ、惡魔の様な雲の間からは眞白い寒の塊りが遠慮會釋もなうぶつ付かつて来る、爰の樹間彼處の山隅からは刃の様な鋭い是は又寒の息とでも云はうか、それが脛と云はす耳と云はす突貫して来る。人も馬もあつたものでない。それでも寒稽古はやらねばならぬ。休みにはあらぬのだ。一寸普通の坊ちゃんじや聊覺束あい。仕事と云はねばあるまい。が此處即ち寒稽古の寒稽古たる所である。熱心と意志は此間に於て始めて呱呱の聲を揚くるのである。艱難汝を玉にす、古いが

矢張眞理は眞理に相違ない。吾柔道部は今年一月十日から例に依つて寒稽古を始むる事にした。今年は例年になく期間を三十日といふ事にした。今迄のに比べて随分長いが本場所の講道館も三十日である、一般に三十日が普通になつて居るからといふのでかくしたので。三十日と云へば今迄の三週間と比べて余程詰め悪い夫にも拘らず下記の如く二十二人の皆勤者を得たといふのは甚だ喜ぶべき頼もしき愉快ある現象である。何時も云ふ事ではあるが、龍南健兒の風氣日に滅びて行くのを口癖の様に云つて居る連中は、ちと眼を此邊にも廻して貰いたい。雪にも恐れず風にもめげずまして龍襲虎搏膽を練り氣を養つた、健兒の風貌は洵に觀々乎として巖の如くである。二月九日は其最終日であつた。

越えて十一日即ち紀元の大節を卜して鏡開式を行つた。風こそ少し寒いが世はもうすつかり春

めいて麗らかな美しい陽炎が武夫原の若草を罩めて居た。松浦校長始め兒島擊劍部長並ひにモール先生列席せられて十一時といふに式を始めた。先づ校長起つて嚴寒と戰つて勇壯に凱歌の聲をあげた皆勤者の意氣を賞し尙將來も永く此精神を以て持續して行かれないといふ意味の告辭を述べられて夫れから劍柔の亂取試合に移り終つて兩部皆勤者に皆勤証の授與式を行ひ、併せて三級乙以上の昇級者に黒帶を授與し、それで式を終つた。尙爰に併せ記すべき我柔道部に於て寒稽古三年皆勤者は池田庄五郎君及野村直躬君の二人である。一年間の皆勤ですらも容易でない、況して三年間の皆勤は余程の勇氣と熱心とを要する。兩君の如きは確かに技術以外或何物かを修養し得たに違ひない。

式後は例のせんざい。雑煮の無禮講何れ劣らぬ健啖家揃ひいや食ふはく、瞬く中に四斗桶の底を叩くに至つた。已れは七杯イヤ已れは十杯と

無邪氣を爭ひも何となく春めいて居て武張つた中に一道の温味が溢れて居た。

例に依て皆勤者氏名を掲れば左の如くである。

寒稽古皆勤者

湯本不二男	池田庄五郎	今井 博茂	兒玉 勲夫
守田良太郎	平田喜代太	魚住 正男	森 信
宇都宮一磨	西澤 義徽	野村 直躬	平林 文雄
神山 義次	石田 淳三	光永 正男	兒島 庸雄
岡部 常	岩尾 蛭龍	青木 俊次	大内 兵士
橋本 久雄	戸 張 勇		

三年皆勤者

池田庄五郎 野村 直躬

鶴城風雲錄 (但し素人の傍觀記あり)

時は維れ明治四十一年新春第一日、我が野球團とテニス團とは堂々鹿兒島に着す。武夫原の枯草を踏みにじり、龍田風を身に浴びて、夏の日冬の朝鍛ひに鍛ひたるその鉄腕をば彼七高軍の頭上に見舞ひ、その元氣をば薩南の天地に發揮せ

んとて今我軍は是に來れるあり。捲土來り浸す外敵を迎へて勇み戦ふもまた男子の渴仰する所。されど奮然深く敵地に入り、山なす敵の應援軍中に於て已が本領を發揮すること更に最も男子の痛快とする所にあらずや。

春陽は溢るゝ瑞氣を湛へて一百二の都城に臨めり。旗は微風に翻り、人は屠蘇に飛ぶ。獨り炎々たる活火に焰ゆるものは櫻島と我軍となり。

銀杏城下の敗戦よりあはれや薩摩阜人が怨を城山の梢の風に止めてより早三十年。今龍山の健兒再び來りて城山の寵兒を破らむとす。城山の靈轉た今昔の感にや堪へざりけむ、我が膝下に來りて憐みを乞ふよと夢みて醒めしは第三日旭日破窓に笑むの時なり。

全日午后一時鶴丸城内運動場には早くも觀覽者山の如く、七高應援軍また一團をあし、手に手に應援旗をかざせるも勇し。將に野球戦は始まらんとす。

審判官

林田君(元應援選手)

(高七) 安木田 猪川 上戸 根三

P CF 1B SS 2B LF 3B C RF

(高五) 伊飯色 加佐小 尾住三

(高) 藤田川 藤々澤 崎田好

C P 3B 2B SS LF RF CF 1B

時至り、メンバーまた整ふ。天晴れ寒氣強し。

我軍先づ守る。我撰手悠然笑を會みて定位置に就くや拍手の聲鶴嶺を動かして響く。續て七高應援軍の軍歌始まる『……安全球に犠牲球……』

第一戦 先頭第一名乗をあげて顯はれしパウター

は薩南の野に獨り驕名を響かせる敵の投手安田將軍あり。いで一打にと立ちたる姿も勇し、さ

れど我にも何ぞか剛のものゝかからん、我加藤こそは其昔全七名古屋の中學にて共に双花と歌はれし仲ありとか。時あるかを今は彼我に分れ

て龍虎相闘はんとす。長棒一閃するよと見れば、球は已に3Bの手にありて先づ脆くも倒れたり。木村はPゴロを奉り巖の如き飯田の爲めに葬られ。田中IBにフライを送りしがもとより敏捷確實の聞のある尾崎の御手の中。拍手。彼に得点あり。我軍代りて攻む。

伊藤先づゴッドボールにて一壘に進む。次で飯田は四球の恩典に浴して一壘に入る。色川立ちて長棒一振すればあはれフライとありて功を2Bに收めしめぬ。續て顯はれしは加藤あり、熱球を以て第一壘を奪ふ。其間伊藤は本壘に突入せしむ。捕手の爲めに刺さる。残念。佐々三振にて退く。兩軍共に得点あり。

第三戰 猪野SSゴロにて辛じて一壘を得るも進んで第二壘を得んとて加藤の技に倒さる。川崎はSSに熱球を送りて一壘に入り、土坂のパンチ功を奏し、一壘を経て二壘に進む。此間川崎を以て本壘に歸らしめ、敵をして先づ機先を制

せしめしは遺憾なりき。されど益々落ち付きたる飯田投手の熱球に戸田は三度振。根岸また左翼にフライを飛ばして斃る。彼に得点一。我小澤氣を勵まし立ち向ひたるもIBにフライを呈して倒れ、尾崎またSSの爲めに殺され、住田三振の厄に會ふ。

第三戰 三浦漸く一壘に進みしも飯田の爲めに隙を窺はれて一壘に立ち消ぬ。安田は熱球を以てSSを見舞ひ一壘を抜き二壘を奪ひ更に木村のゴンドに乗じ生還せし動作は目醒まかり。田中は一壘を得しも加藤の早業の爲めに一壘に死す、此間木村生還す。猪野また3Bゴロにて一壘に進み隙を得て歸る。川崎も二壘に進み、土坂が一壘に倒れし爲め立坊。彼得点四。敵漸く得意にして應援軍益々振ふ。

第四戰 戸田はPにて一壘を得たれど堅固ある二壘の關門にて追ひ歸へされ、根岸は一壘に亡び三浦は四球の恩恵にあづかり、安田はSSを

ライを以て一壘に進み二壘を抜き、が先きの三浦本壘を隙ひあはや生還せんとせしとき九天直下天球二壘より飛びしと見、が直ちに我捕手の爲めに討たれたり。

色川雲を衝いて出で長棒三振而も敵捕手のミスを利用して一壘を抜きしが是に投手のIBの手に達するや否や色川はベースの外に倒れてアウト。加藤續て四球を利用して進み、も全様の奇計にかゝりて一壘に死す。佐々はSSにフライを打ちて倒る。彼我得点なし。

第五戰 木村三振せしも如何なりけむOの失にて一壘を取り、田中二壘へゴロを送りて進む。

猪野はゴロにて倒れしが木村生還す。川崎、上坂共にアントにて進み田中をして生還せしむ。

是に於て戰は益々混乱を極め、應援軍は將に狂せんばかりに猛る。戸田進み根岸出で川崎上坂歸る。三浦一壘に倒るゝと見れば此方戸田生還す。安田打てば根岸歸る。續で木村進み田中

出でてあはれと見しが木村が勝ちに乘じて無謀本壘を隙ひて倒れ乱戰是に治まる、

地形に馴れず敵狀に明からず思はぬ乱戰を來せしも我軍士氣は益々奮ひ小澤は一二壘を経て三壘に進み、尾崎またPに住田は一壘に各々ゴロを呈し其の失に乗じて進みしが小澤は本壘に入らむとて倒れ、三好のゴロ三壘を襲ひこれまた一壘に進み是にフルベリスとある。伊藤デッドボールとあり尾崎生還す、而も尙フルベリスなり此の時重任を負ひて立ちしは飯田なり、天あるかあ彼常の如振はず三振にて退き色川ゴロにて倒る。

第六戰 我軍守り堅く、猪野は投手へゴロを送り川崎は三振し、上坂二壘を襲はんとして各死。流水石に激して花となる。今や我軍の眞價を顯來らむとす。加藤は猛然としてボックスに立つや天も衝けよと打ち擧げ、球はOFの彼方に飛びOF投手追ふと雖も及ばず兩軍拍手の中に一壘

早三壘を得たり。敵軍啞然たり、誠に三日間を通じての唯一球あり。佐々の一二壘間のゴロにて加藤生還す、小澤のフライは功をCFに歸せしめ、が佐々猛然本壘に還る、尾崎は二壘に強ゴロを送りて一壘に進みしが、住田三振、三好は一壘の奇計に倒れたり。

第七戦、戸田は一壘に、根岸はPゴロに三浦は三振にて枕を並ぶ。伊藤は一壘に死し飯田色川相續て倒る。

第八戦、安田、木村、相續て我が投手の爲めに弄殺せられ田中またSSゴロにて退く。

加藤はSS佐々はIB小澤はPゴロを呈して退く

第九戦、愈々決戦なり、敵も味方も振ひ立ちしも猪野は3Bゴロにて一壘より追ひ歸され、川崎は二壘の關所にて喰ひとめられ、上阪また三振。尾崎はSSゴロにて住田は三振にて三好Pゴロに倒れ目醒しきこともなく第九回を終りぬ。

時に三時。風靜まりて日漸く傾く。山の如き觀

覽者は歡聲裏に散す。敵の應援旗特に得意の色を示す。然り十一點對四点にて七高軍の勝ちに歸したるなり。我は敗れたり。敗るゝやもとより其の因て來る所あり。されど敗は勝を教ふ我は今や地形に馴れ、敵の投球に親み、敵がた定りのプントを觀破せり。されば發憤大に次回に期する所ありたり。余は花と散りたる今日の勞を謝し屬望して次回を待ちぬ。

第二回戦（一月五日）

昨日のテニス戦に於て散々たる敗北をとりたる七高軍は今日こそ五高軍にスエックの御禮を見舞呉れんす意氣込猛々し。誠にさもありぬべし。我軍また大に期する所あり、悠然として先づ守備につく。午後一時プレーの令下る。

第一戦、敵の老將田中先づ2Bにゴロを送りて退きしを手初めとして安田はフライを打ち功を飯田に收めしめ、猪野は四球を得て一壘に進み、も二壘を奪はんとして加藤の快腕に刺さる。

我軍戦士の先頭として伊藤顯はれ長棒一振すれば猛烈な3Bを襲ふ、3Bこれを失く伊藤LBを得、住田は四球を利用して進みぬ、この時捕手のパスにて住田二壘に伊藤三壘に達し將に本壘を隙はんとす。而も我に一人の戦死あかりしもあはれ色川加藤佐々相續で三振に倒れんとは。敵投手の功また多とすべし。

第二戦 川崎3Bにゴロを呈して一壘を得、上坂SSゴロにて川崎に従ひ、根岸また投手の失に乗じて一壘を浸せり。而も一人の戦傷あくしてフルベリースあり、敵の應援軍はこゝぞ「振へ七高！振へ七高！萬歳！」を絶叫す。されど巖の如き飯田は平然一笑を送りて投げ出す熱球に戸田三浦三振木村フライにて枕を並べ本壘は死屍累々。小澤はダイヤモンドを一壘に送りて斃れ、尾崎は三振し、飯田はPゴロにて退く。兩軍の危機は一旦は兩軍の投手によりて救はれ、兩軍益々奮ひて戦愈々佳境に入らむとす。

第三戦 田中はSSフライにて安田は三振にて、猪野はCFフライにて倒る。三好は3Bゴロにて伊藤はSSフライにて住田はPに隙を窺はれて退く。彼我得點更になく戦機愈々熟す。

第四戦 幾回か急にして幾回が救はれし風雲今何れに向て爆發せんとする。川崎SSゴロにて上坂は三振にて、根岸はPゴロにて死去。我が色川是に雲を衝ひて顯れ打棒一閃SSに安全球を送りて一壘を乗り取り、加藤ブントに成功して進み、佐々またRF飛球を呈して續き色川生還し風雲益々急。敵の援軍叫びもやらず只空拳に汗を握り、投手勉めて沈静を求む。只我數十人の援軍の心意氣高く、殊に神山君が正しく立ち出で「ノーボール、ノーアウ」など叫べる聲援は沈静を破りて満場に響くこと屢々兩軍將士その熱誠に感動せし功没すべからず後戦の終ゆるにあたり敵兵の叫ぶあり曰く『破れ帽に金鵒勳章を與へよ』と蓋し君は應援の爲めに帽子を損せしあり。次に

小澤は2Bゴロにて倒れしも加藤佐々をして生還せしむ。尾崎一壘に安全球を送りて一壘を得しも飯田は2Bゴロにて死し、三好デッドボールにて進みしが伊藤3Bヘゴロを獻じて倒る。

第五戰 戸田はSSと2Bとの間に安全球を送りて一壘を獲しも三浦木村は各我投手の熱球に弄せられて三振。田中2Bゴロにて退く。我住田は三壘の頭上に安全球を飛ばして一壘を乗りどり、色川Pゴロにて阻られ、加藤は投手の頭上に安全球を送りて一壘に進み且つ住田をして生還せしむ。五高は更に一點を加へ敵益々苦戦奮闘し、加藤はあはれ二壘の露と消へ、佐々三振。

第六戰 安田先づ安全球を全翼に飛ばして一壘を抜き更らに二壘を奪ひぬ、未だ一名の戦死ありさればベースを取るに妙を得たる安田こそ末頼母敷ランナーと見わしが猪野が打ちし球SSを襲ふよと見れば佐々敏捷にこれを捕へ3Bに送りて安田を倒す。猪野は是に猛烈2Bを抜かんとせ

しが加藤將軍のミットの露と拂はれたり。鬼神と疑はるゝ加藤の妙技には敵の援軍一千も舌を巻き『オーソリチー！』とほめたたり。川崎1Bの失に乗じて進みしも上杉Pゴロに倒れし爲め立坊。小澤はSSゴロにて一壘に進み、尾崎また2Bゴロにて進みしが何れも二壘にて討死。飯田はSSゴロにて退く。

第七戰 根岸はPゴロ戸田は2Bにフライを送りて倒れ、三浦2Bの失にて一壘を得しも木村3Bヘゴロを呈して退く、三好はSSヘフライ、伊藤は2Bヘフライを飛ばして葬られ、住田2Bの失にて一壘を奪ひしも色川三振せり。

第八戰 田中3Bヘゴロを送りて一壘を抜きも安田の3Bヘゴロを獻じたる爲め二壘に刺さる。猪野はフライを2Bに送り漸くにして一壘を得、形勢漸く可あらむとせしも川崎は三壘し。上坂SSヘフライを打ちし爲め安田猪野は立往生。加藤出するや憂然フライを右翼に呈し其の失に乗じ

て一壘を挟き佐々はフロント功を奏せずして退き小澤はデッドボールにて進み、尾崎はフライを飛ばして功をSSに歸せしめ、飯田また2Bに花を持たす。

第九戰 終回あり、敵は先途と血戰甚だ勉めんとするが如く、敵の援軍極力聲援す。されど敗るゝものは遂に敗る、根岸は1Bにフライを飛ばして倒れ戸田漸く二壘迄抜きしも三浦は3Bへ木刺はPへ各ゴロを奉りて第九回を結ぶ。

時に午后三時黒板の示す所は是れ、七高軍得点〇五高軍得点四フラスアルファ也。今日は兩軍の將士共最も能く攻め最も能く防ぎ且つ最もよく其の實力技能を發揮したる見事なる大戰なりき。敵決して失あるにあらず彼は昨日より能く奮戦せりベストを盡せり。而して我は是に大勝を収めたるあり。我數十人の援軍は三千の敵の援軍を倒す天にも登る心地せり。微風徐るに彼が應援旗を送り、夕陽獨り我軍の頭上に燦た

り。

第三回戰（一月七日）

一月六日は決戰の日あり。敵軍の今や憤慨措かず我軍また大に期する所ありたるに早朝より細雨霏々として龍虎の争を和げんとするもの、如く、兩軍の將士は憤を抑へて明日を待たんとす抑も校務はしかく我軍をして滞在せしむるを許さず。故に若く明日も今日天氣豫報の報する如く雨天とせば不本意ながら歸校の外なきなり。而も午后雨漸く烈しく万一明日晴天となるもグラウンドは試合に堪へじと想はれたり依て。我援軍及テニス軍は今夕を以て歸途に着けり。ベース軍のみは責任を重じ獨り止まりて敵と折衝を重ねんとせり。

七日起き出すれば曇天あり。グラウンドの使用はとても不可能なり。されば余は早朝より市外に訪ふ所あり午後歸り來れば豈計らんやヤッチングの響已に高からむとは。かくて余は是に詳

報するを得ざるを憾み且つ諸兄に謝す試合中細雨の催すあり敵のP倒れ我ヲナリ轉ぶ。殊に投球上の困難はさこそと思はれたり。初め我軍は試合の甚だしく困難あるべきを主張したるが如し而かも敵の止まり難き切望により此に覺悟

いつくこの難を犯したるあり。されば余は校友諸兄と共に我軍士の義膽を喜び特に其の勞を多とせんとす。當日の結果七高得点十一。五高得点三也。

編輯 便り

拜啓仕り候少々口廣きを申す様なれども嚴冬の寒氣は儼に龍南一千の兒を降參させ、筆を取るの勇氣だに無くせしことは事實に候ふべし、先程掲げ置き候二月十五日さ云ふ締切期限も有邪無邪の間に繰延べさ相成り一日々々待てどツイ甘露の日和にも出會ひ申さず、此分で待たば遂に發行の時はなかるべしと、よい加減に見切を付けて投書箱を探れば、集れる原稿は僅かに二三篇にて、多くば之も寄宿舎に御馳走がないの點檢がうるさいのと、丸で門違ひの壁訴訟のみ、外に僅底にバラ／＼する者は眞黒けなる鼠の糞にて候ひき。

借而、諸先生へ御依頼申上げと分もかれこれにて出來申さず、小生等同人にて止むなく秃筆を振ひ申し庸り候處、活版舎より、多忙のため百頁以上の雜誌は斷はるること、そのため小生等同人の手になりし分、論説一篇、小説一篇、雜報二篇程を割愛(?)致し出來る丈け速に發行のつもりにて印刷を命じ候、然るに活版所の方にて彼れ是れ故障あり校正も延引、漸く發行の運びに到りし雜誌、薄ッペラなるは止むを得ざる次第に候。

次に本期間の最終號百廿五號は四月廿日に發行のつもりにて、大に投稿を歡迎のつもりにて候、

草々不(將子)